

弱さが作る共同体

[聖書] テサロニケの信徒への手紙— 5章 12～25節

兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。互いに平和に過ごしなさい。兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。“霊”の火を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてください。兄弟たち、わたしたちのためにも祈ってください。

[序] 「教会」って何だ

7月に入りましたね。コロナウィルス感染の心配が消えたわけではありませんが、今月から、人数を制限しない礼拝を毎週行ってゆきたいと思います。互いに予防し、週報にも「お願い」として書かせて頂いていますことをそれぞれが心に留めながら、ご一緒にこの日曜日の朝、礼拝を捧げてゆきたいと思います。

この度のことで改めて考えさせられていますことは「教会」とは何なのだろうということ。教会に集まることが出来なかった約2ヶ月の間、皆さんはどういう思いで過ごされましたか？ 教会が「教会に来ることを控えてほしい」と言うことなどこれまで無かったことではないでしょうか。それは一つには教会が集団感染の現場になる恐れがあったからです（まだ心配が消えたわけではありません。決して甘くは考えられません）。皆さんは教会に行けない間、「自分にとって教会とは何なのだろう」と考えることがあったのではないのでしょうか。もしも「教会」が礼拝をするだけの場所であり、このコロナで自分と礼拝が遮断されてしまったなら、信仰そのものも消えて行ってしまうということになりかねませんよね。けれども、皆さんそんなことはなかった訳です。私は是非皆さんお一人ひとりのこの間の思いや、或いは、家の中でどのように神様と向かい合って来られたのか、そのようなことをお分かち頂けたら有り難い

など思っています。それは、「教会」を励ますからです。私自身も励まされるし、皆さんも励まされると思う。決して優等生っぽくなくてよいのです。本当にコロナが恐かったとか、礼拝堂に行けない、皆と会えないのが辛かったとか、この聖書の言葉に自分は励まされたということや新しい発見でも、どのようなことでもお分かち頂けると嬉しいなあと思っています。礼拝の中でそのような「証し」の時間を設けましょうか。或いは週報のコラム欄に載せさせて頂くというのもいいかもしれませんね。

[1] 「教会」とは「交わり」

私は今日のテサロニケの信徒への手紙一の最後の部分を読んで、何か心にスーッと入ってくるものを感じました。ここでパウロは、何の難しい神学思想を展開しているものではありません。愛する者たちに送る手紙の締めくくりの部分です。「これだけは言っておきたい」ということを書いている、**頭脳ではなくて、心が伝わってくる部分**です。

「教会」というのは、日本語では「教える会」という漢字になっていますが、あまり良い訳とは思えません。原語では「**エクレシヤ**」と言うのですが、これは「**集められた者たち**」というような意味なのです。「教会」とは本質的に「交わり」ということなのです。ですから「教会に行く」というのは正確には違うのです。「教会」というのは、場所ではなく、二人以上の信者がいて、心を合わせる事が出来ればそこが「教会」なのです。いや、自分は独りぼっちで礼拝を捧げていたという方もいらっしゃるでしょうね。けれども、実はあなたは独りではありません。場所は離れていても**あなたのために祈っている方**があるからです。あの人・この人が必ずいました。また、私たち夫婦も二ヵ月間皆さんの名前を挙げて祈っておりました。また、私たちのためにも祈って下さっていたことを感謝しています。「教会」というのは「交わり」です。パウロは、祈りを込めて、かつて自分がいた教会に手紙を書き送っているのです。

[2] 主イエスの恵みを分かち合う生き方とは

このテサロニケの信徒への手紙全体の中でも、一番知られている言葉は、この5章16～18節だと思えます。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」と。ここは命令形ですね。—この三つの真ん中に「絶えず祈りなさい」とあるのが大事なのかなと思えます。「喜び」も「感謝」も普通に良く言われる言葉かもしれませんが、教会の交わりは、その真ん中に祈りがあるのですね。**祈りの中でこそ与えられる「喜び」であり「感謝」なんです。主イエス様がいて下さる交わりだからです。**「いつも喜び、祈り、感謝せよ」。—「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

先程、“もしも「教会」が礼拝をするだけの場所であるならば” というようなことを申しましたが、それは礼拝を軽んじるという意味ではありません。事実、初代の教会が一番大事にしてきたことは、**主を讚美し御言葉を聴くことと、主の晩餐の二つ**でし

た。けれどもそれが「教会」のすべてかと言うとそうではなく、その二つは大事ですが、その礼拝に至る、また、礼拝に支えられる「交わり」こそ、目に見えない生命線です。「ああ、この交わりの中には、主イエスが生きておられる」と心から思える交わり。それですね。それこそが「教会」が、単に仲良しクラブでも、生活に余裕のある人たちの社交場でも、或いは学校のように、ただ聖書研究をするサークルでもない共同体の命なのだと思います。それは、**日曜日だけのことではない**でしょう。むしろ、**日常の私たちの「生き方」が問われているのだ**と思います。

「生き方」と言いますと、なにか立派な、徳の高い生き方とすぐに思いがちですが、そうだと律法主義になってしまいます。「ねばならない」ではありません。パウロは教会の群れに“**勧めて**”いるのです。**主イエス様の恵みを分かち合う生き方とは何か**を。とても具体的です。12節からをもう一度ご覧下さい。

「兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。互いに平和に過ごしなさい。兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい。」

私はこの言葉にとっても慰められます。「互いに平和に過ごしなさい」と。教会という場は、心穏やかになれる所なのだというのですね。逆に、「心穏やかになれない」時というのは、**人を受け容れられない心が働く時**ではないでしょうか。これは、私たち誰もが持ってしまう厄介な思いです。「あの人は受け入れられるけれども、この人は受け容れられない」。誰もがそんな人を裁いたり、排除しようとする心を隠し持っています。私自身もそうです。いつだって神様にごめんなさいを言わなければ一日が終らない人間です。けれどもそのように、人を受け容れない心が剥き出しになっているような交わりであれば破綻するでしょう。そうではなく、神様・イエス様の思いは、排除ではない、本当に支え合う交わりなのです。“**気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい**”。パウロは「**霊の火を消してはなりません**」とも言いました。そう、**聖霊**がその交わりを作って下さるのです。

[結] 教会は、弱さを誇る共同体

さて、「弱い者たち」という言葉を聞くと、私たちは、自分を「助けてあげる側」に考えてしまうことが多いのではないかと思います。「**弱者に寄り添う**」などという言葉も、どこか**上から目線**に聞こえてしまう気が致します。私は、そういう上下関係や助ける人と助けられる人という立場の違いを超えた言葉はないかな、と思っていました。そうしたら、ありました。やはりパウロの言葉ですが、コリントの信徒への手紙二の

12:9です。パウロは「喜んで自分の弱さを誇りましょう」と言っています。これは革命的な言葉です。彼は自分の「強さ」を誇るのではなく、弱さを誇ろうと言います。何故か。「キリストの力がわたしの内に宿るように」と彼は言います。キリストの前に、人は真に弱くなれるのだと思います。そうすると、人は、他者と繋がることかろうじて出来るのです。「弱さ」という同じ土俵に立つことが出来るからです。これは見せかけのポーズではありませんよね。本当に私たちは弱いし、罪深い。しかし、だからこそ、イエス様は、私たちのために、私のために、あなたのために十字架について下さったのですよね。

キリスト者の評論家、作家の若松英輔さんは、奥田知志牧師(東八幡キリスト教会)との「コロナ禍の中で」というリモート対談(YouTubeで観られる)の中で、「弱くならないと人間は祈りませんよね。その祈りの中で、愛というものが出てくるのだと思います」と語られていました。ああ、本当にそうだと思います。「弱さ」⇒「祈り」⇒「愛」の順番ではないかと語られていました。愛の出発点は「弱さ」なのですね。そう、教会は、「弱さ」によって作られる共同体ではないでしょうか。

そして主イエス様こそ、私たちの交わりを完成させて下さるお方です。まだ闇の力も現存するこの不完全な地上にあって、しかしやがて私たちが与ることが出来る**天の祝福とその約束の光**を、この朝も与えて下さって、生きることを励まして下さるのです。パウロのこの祈りです。「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてください。」(一テサロニケ 5:23~24)

お互いのために祈りましょう。あなたの隣に座っている方の祝福を祈りましょう。私たちの家族のために祈りましょう。あの人この人のために祈りましょう。弱い私だからこそ、あるがままの自分の心受け止めて下さるイエス様の御腕に抱かれている者同士として祈りましょう。

「私たちは弱い時こそ強い」(二コリント 12:10)。キリストが私たちの内に生きて下さっているからです。

お祈り致します。

主よ、皆で一緒にあなたの祝福に与ることが出来ますこと、感謝です。新型コロナのことでこれからまた教会は試練を迎えることもあるかも知れません。しかし、教会とは、建物ではありません。私たちの主にある交わりです。どうか、祈り合い、支え合い、愛し合う交わりとして私たちを育て下さい。お互いがお互いのことをよく見、受け容れ、共にあなたのみ言葉の前に首を垂れ、癒しと恵みを頂くことが出来ますように。この交わりを愛し、祝福して下さい。イエス様のお名前によって。アーメン。